図画工作科

松田由美子
谷本克典

1　図画工作科における知識創造とは

造形とのかかわり

私たちの身の回りには、すばらしい造形の世界が広がっている。しかし、既にすばらしい世界があり、その世界を私たちが享受しているのではない。私たちは、目前の対象から造形的なよさや美しさを感じたり、よさや美しさに基づいて考え、表現したりしている。この造形から働きを受け、働きかける双方向の関係によって、大きく広がる造形の世界を自らがつくり出しているのである。図画工作科では、この双方向の関係を「造形とのかかわり」ととらえた。

造形に対する価値観

その造形とのかかわりを支えるものは、一人一人に内在する造形に対する価値観（以下「価値観」とする）である。どのようなものによさや美しさを“感じる”か、どのように“考え、表現する”かという「価値観」が広がり、更新されることで、造形とのかかわりが豊かで新しいものになっていく。

図画工作科の役割

図画工作科の役割は、子どもの実態に応じて、意図的、計画的に造形との出会いをつくり、子ども一人一人の「価値観」を大切にしながら、造形とのかかわりをより豊かで新しいものになるよう支援していくことである。そして、そうした造形とのかかわりを通し、子どもは、自分の思いや夢を色や形に託して実現させることに喜びを味わう。

子どもは、既存の「価値観」をもとに造形とかかわっていく。そして、他の様々な「価値観」との出会いの中で自らの「価値観」を広げたり、様々な「価値観」とつなげる中で自らの「価値観」を更新したりしていく。常に広がり、更新された「価値観」をもとに自分の思いや夢を実現させていくのである。これは「ひと」「もの」「こと」の背景にある様々な「価値観」との出会いの中でこそ実現されていくものでもある。そして、一人一人の「価値観」がより豊かで新しい造形とのかかわりを生み、集団としての「価値観」を広げていくのである。このくり返しの営みの中で、自分にとって新しいもの、自分ならではのもの*1がつくり出され、自分の思いが実現されていく。

*1　「自分にとって新しいもの」とは、これまでの自分をふり返り、更新をくり返しながら生み出した、自分にとってこれまでにない「感じ、考え、表現したこと（行為も含める）」を指す。
「自分ならではのもの」とは、他とのかかわりの中で自分が育み、見いだした他の誰とも同じではない「感じ、考え、表現したこと」を指す。（本校紀要第59集）

これらの考えをもとに、私たちは図画工作科における「知識創造」を以下のように定義した。

図画工作科の知識創造

> **様々な「価値観」と出会い　つなげることで**
> **自らの「価値観」を広げ　更新しながら　自分の思いを実現させていく営み**

2　図画工作科におけるかかわりの「場」をデザインするための考え方

子どもが自分の思いを実現させていくプロセスをつくり出すために、次に述べる視点に基づいてかかわりの「場」をデザインしていく。

(1)　比較を通して知識創造のプロセスをつくり上げる

常に「比較」という視点を大切にして知識創造のプロセスをつくり上げていく。その視点は次の三つに集約されると考えている*2。

①「今の自分とこうなりたいと願う自分」との比較
②「自分と他」との比較
③「今の自分と前の自分」との比較

これらの視点によって、つくり、つくりかえ、つくりつづける自分を認識することができると考えている。この認識は、さらなる自分の思いを実現させる知識創造をうながしていく意欲となっていくだろう。

*2　ここでいう「自分」「他」とは、それぞれが「感じ、考え、表現したこと（行為も含める）」を指す。その背景には、それぞれの価値観が大きくかかわっている。

(2) 知識創造のプロセスを意識し　４つの場を活用する

知識創造のプロセスを意識しながら、自分の思いを実現させる一人一人の「価値観」の表れを中心として、以下の４つの場[*3]を有効に機能させていく。

*3　図画工作科では、①引き出す活動　②生み出す活動　③ふり返る活動　のそれぞれの活動の中にも４つの場を意識し、かかわりの「場」を創出していく。ここでの４つの場はそれぞれが独立し、順序立てて流れるとは限らない。互いに関係し合い、ある場が繰り返されたり、不連続にジャンプしたりする場合もあると捉えている。
（本校紀要第56―59集）

ア．既存の価値観をもとに造形に働きかけ　自分の思いや意図をもつ場で

まず、表現への期待と、様々な表現を試そうという意欲をもとに自分の思いをもつことが必要である。そこで、働きかける対象は子どもにとって興味や関心を引くものであること、その造形のよさ・働きかける行為の楽しさ・行為の結果生まれるよさを十分に感じられることを大切にしながら造形との出会いをつくっていく。そして、さらに多様な表現の可能性を感じ取れるようにするために、働きかける対象から、それぞれが感じ、考えたことを表出し合う場を設ける。そこから、新たな、またはこだわりを認識した自分の思いや意図がつくられることになる。

イ．自分の思いに合わせて　感じ　考え　表現する場で

自らの「価値観」をもとに、自分の思いを実現させるための活動に教師も共感し、より積極的に表現に取り組めるように学習環境を整える[*4]。そして、それぞれの思いや意図を把握し、個々の「価値観」が集団で認められるような場をつくることで自分の思いの実現を支援していく。また、一人一人の提案や悩みを集団に広め、受け止められるような場をつくることで、共に造形との新しいかかわりをつくり上げていこうとする集団の意識も高めていく。

*4　例えば、表現のための時間や空間の保証、必要な材料を自由に使える環境、表したいことに合わせた材料や用具の扱い方の提示である。

ウ．自分の価値観と他の様々な価値観を関連づけて　価値観を広げ　更新する場で

子どもは、感じ・考え・表現し、いろいろな造形とのかかわりから、また感じ・考え・表現し…と、不断にその結果を受け止め、判断しながら表現している。子どもの中では常に自分を見つめることが行われているが、ともすると狭い見方になる場合もある。そこで、造形活動の過程で、一人一人がその後の表現の指針となるものをもつことができるように、自分の表現を見つめ直す[*5]場を設ける。また、相互鑑賞する機会も適宜設け、互いのよさや表し方の工夫について、認め合い、アドバイスし合う[*6]。その中から、友だちの表現や取り組みからも自分にはないよさや美しさに気づき、「価値観」を広げたり、更新したりしていくだろう。そうして関連づけられ新しくなった価値観で、子どもは、自らの表現を見直し、つくり、つくりかえ、つくりつづけていく。

*5　最初に発想し、構想してきたことと比べてどうなのか、部分だけではなく全体としてみた場合どうなのか、今の自分でまだ試みられることはないのかなどを観点とする。

*6　この相互鑑賞は、エ．とも関連し、自己評価活動の一つに位置づけている。相互鑑賞の際、例えば、鑑賞カードとして複写式メモパッドを適宜使用する。複写式なので、表現や取り組み方のよさを捉え記述したものは、その場で相手に渡すことができ、自身の手元にも残りふり返ることができる。

エ．自らをふり返り　今の自分の価値観を認識する場で

これら一連の造形活動の途中、そして最後に自己評価活動[*7]を取り入れ、自己の学びを確認すること、またその要因を探ることを大切にしたい。

自己評価活動を通して、自分の思いの表れや「価値観」の変容を明らかにしていくことができるだろう。そこでは、表現の過程の中に点在する自分らしい表現のよさを見つけつなげたり、悩んでいたこと、それが解決に向かう過程、変わっていった自分をふり返ったりすることになる。そして、それらを交流し、よさをつくり上げることができた要因を話し合う中で、働きかけ、働きかけられた、ともに学ぶ姿も大切な価値として位置づけさせたい。

子どもが自分の思いを実現させていく過程は、ふりかえりカードの記述からも、一人一人の前の表現と今の表現の比較からも見取ることができる。「ひと」「もの」「こと」とのかかわり合いの中で、一人一人の子どもをとりまく場や素材、表現されたものが、その子どもの新たな表現を誘い出すものとなる。そうして絶えず変化していく表現を注意深く見守り、思いのよさの表れを認めていく。また子どもが発する言葉、つぶやき、悩む表情、笑顔、表現に没頭している姿など、その瞬間その子どもになにが起こっているのかも大切にして見取りを行い、声をかけながら、子どもの中の変容をとらえ、フィードバックしていく。それらの教師の働きかけも自らの変容を明らかにする相互評価として、自己評価活動を支えるものになっていくと考えている。

*7　自己評価活動には、三つの段階があると考えている。
ア　自己達成評価
イ　相互評価
ウ　自己客観評価
（本校紀要第56集）
その方法としては、自らの感じたこと、考えたこと、表現したことをふり返りカードや作品カード、作品の写真（途中過程も含めて）、相互鑑賞カードなどを用いて記録したものを活用していく。

3　実践例　―４年―

(1) 題材名　　顔・かお・カオがいっぱい！　（感じ方を広げる）

(2) 本題材における知識創造

「顔」を鑑賞対象として　互いの様々な見方・感じ方に出会い
「形」「色」「材質（ここではタッチ）」を重ね合わせた多様な見方・感じ方へつなげることで
自らの見方・感じ方を広げ　更新していく営み

本題材は、造形に対する見方・感じ方を広げ、深めながら、自分らしい見方・感じ方を育んでいくことをねらいとして設定した鑑賞領域の題材である。

これまで子どもは「ごっこ遊び」や「見立て遊び」の経験があり、その中で造形への見方・感じ方を変えながら、自由に発想し、その時々を楽しんできた。しかし、その経験には対象や頻度などの差があると考えられる。子どもは、これまでの図画工作科の学びから、他とのかかわりの中で、「自分」と「他」を比べ、自らをふり返って、次へと取り組んでいく様子が見られる。そこで、この時期にその経験の差を生かしながら、見方・感じ方を広げ、新しいものにしていくことができると考える。

本題材は、まず身近にある様々なものから「顔」を発見する見立てを楽しみ、次に、見立てた「顔」を見つめ、さらに、「形」「色」「材質（ここではタッチ）」を重ね合わせて、見方・感じ方を広げ、更新していく学習である。そのために次の四つの活動を位置づけ学習を進めていく。

・身近な様々なものから「顔」を発見する。（鑑賞Ⅰ）
・互いに発見した「顔」を鑑賞し、「顔」の表情への思いを交流する。（鑑賞Ⅱ）
・親しみのある美術作品における「顔（部分）」を鑑賞し、「顔」の表情への思いを交流する。（鑑賞Ⅲ）
・三つの鑑賞活動を一連の活動としてふりかえる。

これらの活動の中で子どもは、自分なりに自分の見方・感じ方を認識し、その度更新が行われていくと考える。仲間の見方・感じ方に触れ、共感したり、違いを感じたりしながら、「自分にとって新しい」見方・感じ方を取り入れたり、自らの見方・感じ方の「自分ならでは」のものを見つけたりする。更新され認識されたものは、次の活動のスタートでは「今の見方・感じ方」となり、その新たな見方・感じ方で、造形に向かう営みが繰り返されるだろう。

本題材では、こうした更新が繰り返されることで、子ども自身がより明確に自身の変容に気づくことができ、次の新たな見方・感じ方の更新に積極的に向かう意欲につながっていくと考える。また、初めは単に「おもしろい」と感じていたものが、次第に「○○だから、こう感じるんだ」と意味をもったものとして認識し、獲得した見方・感じ方は、それぞれの子どもの価値観として、生活の中で生かされたり、今後の造形表現活動の中で生かされていくだろう。

(3) 知識創造の力を育むために

①　本題材におけるかかわりの「場」のデザイン

知識創造を促す三つの活動を意識しながら、図画工作科の４つの場を有効に機能させるために以下の手だてをとる。

ア．自分の思いや意図をもつ場で

本題材では「目と心と頭をきたえよう！」という鑑賞領域学習時の共通のめあてを掲げ、「見方・感じ方」の学習であることを認識できるようにする。毎時間の活動は、めあて達成に向けた一連の挑戦だという意識を持たせたい。

毎時間の鑑賞対象は、より身近で子どもの意識が継続できるものとして、鑑賞Ⅰでは「子どもの生活の場や使っているもの」、鑑賞Ⅱでは「自分の作品」、鑑賞Ⅲでは作家の作品ではあるが、学習してきた「顔」を取り上げる。

イ．感じ考え表出する場　・　ウ．価値観を広げ更新する場で

鑑賞Ⅰでは3ー4人のグループで１台のデジタルカメラを持ち、「顔」を探し、発見する過程を共有する。鑑賞Ⅱでは全員で前時の作品を鑑賞し意見の交流を行った後、１対１のクイズ形式で互いに顔から受ける感じを問い、聴き合う。鑑賞Ⅲでは「なりきり芸術家de鑑賞会」という設定の中、作品の作者になったつもりで自由に作品の「顔」について語り、やり取りする。これら交流の場では、自分の見方・感じ方で素直に対象と向き合い、その表現からとらえたことを自然に出し合ったり、聴き合い、話し合ったりする活動となるよう教師も共感的な立場で支援していく。

エ．今の自分の価値観を認識する場で

活動の中で「見て感じて考えたこと」を学習カードに記述し、自分の見方・感じ方の変容やそのわけを観点とした自己評価活動を行う。鑑賞Ⅰでは、発見の驚き、おもしろさという素直な感想を活動後の自由記述で認識できるようにする。鑑賞Ⅱでは、自分の見つけた「顔」についての見方・感じ方を明らかにした上で、互いの作品を見合う場を設ける。活動後に感想も含めて、もう一度自分の「顔」について記述し、新しく広がった見方や変わった見方、変わらなかった見方などを友達の見つけた気持ちや何をどうとらえたかも根拠にしながら記述できるようにする。鑑賞Ⅲでは、「どんな新しい見方・感じ方をしたか」を問う。これまでの見方・感じ方から「形」「色」「タッチ」を重ね合わせた見方・感じ方に気づくようにしていきたい。

これらのふり返りから、はじめ・活動途中・活動を終えてと「点」としてとらえた自分の見方・感じ方を、「線」としてつなげ、変容してきた自分に気づくようにしていきたい。

なお、本題材で大切となる比較の視点は、「自分と他」・「前の自分と今の自分」の二つである。常に友達の見方・感じ方を自分のそれ

と比較しながら見る意識、聴く意識をもつことで、また、自分の見方・感じ方の変容を認識することで、「自分にとって新しい」見方・感じ方、「自分ならでは」の見方・感じ方をとらえられると考える。そのために鑑賞活動を三つのステージに分け、対象を変えながら繰り返し行っていく題材構成とした。

② かかわりの「場」を支える長期的な取り組み

3年時より子どもに、図画工作科においては「自分の思いで、自分の技で、“自分流”をめざす」ことを大きなめあてにしようと投げかけてきた。様々な学習がそのための“挑戦”であり、よりよい“自分流”のために、互いに“栄養（表現や取り組みのよさ）”を見つけ吸収する。題材名、学習のめあて、やり取りする言葉、相互鑑賞やふりかえりの項目等の中に繰り返し、“自分流”“挑戦”“栄養”という三つの言葉を使うことで、一つ一つの活動を意味あるものとしてとらえられるよう働きかけてきた。これは今後も継続していく取り組みとなる。

また、「もっと・さらに」とよさを意識し、感じ考え表現する姿を認め、その取り組みのよさを広めるようにしてきた。この「もっと・さらに」の意識は、こだわりをもって自分の思いの実現に向かう姿勢から生まれる。4年生なりのこだわる中身の充実に向け、「自分はこんな感じにしたい」という思いを、感じ考え表現しながらしっかり認識していくこと、イメージする力を広げるためにも「感じ」を表す言葉を意識して使い、豊かにしていくこと、自他の願う「こんな感じに」というめあてに照らし相互鑑賞を行うことなど、今まで以上に手だてを工夫し取り組んでいきたい。

(4) 学習計画（総時数３時間）

主な活動と内容	主なかかわりの「場」のデザインと教師の意図
1　学習内容を把握する ・今日は、目と心と頭をきたえる日！ するどい目とやわらかい心と頭で見よう、感じよう、考えよう！	**○「見方・感じ方」を意識する場** 「目と心と頭をきたえよう」というこれまでの鑑賞領域題材でも使用していた共通のめあてを最初に確認することで、一連の活動に共通の視点を与える。またこれは相互評価の観点にもなる。
2　鑑賞Ⅰ　『顔かおカオがいっぱい』　― 顔を見つけよう ○提示作品や題材名から活動のイメージをもつ 〈目と心と頭を働かせて　身近なものから「顔」を発見しよう！〉 ・いっぱい　いろいろ　自分流にだね ○仲間と一緒に学校を探検し「顔」を発見する ・これ顔に見えるね　これとこれが目でここが口　本当だ　顔に見える ・目の形で顔の感じが違って見える　おこった顔だね　しっかり撮ろう ○活動をふり返る ・ずーと見てきたものなのに今日は顔に見えた ・形が違うといろいろな顔になる　みんなはどんな顔を見つけたの？	**○グループで探検し、「顔」を発見していく場** 身の回りのものが「顔」探しという見方をもつことで大きく見え方が違ってくる。「見方・感じ方」のスタートとして、自分なりの見方をもつことで見えるものがあるということを知る場となる。多くの見方に気づくことができるように、３－４人の小グループで場を共有する。発見の驚きも大きくなり、新しいまた自分ならではの見方・感じ方へつながっていくと考える。
3　鑑賞Ⅱ『顔かおカオがいっぱい ♡がいっぱい』―顔から気持ちを見つけよう ○前時をふりかえりながら　作品を鑑賞する ・あれは私の見つけた顔と一緒　同じ見方・感じ方の人がいる　違う人も ・泣いた顔　笑った顔…　顔に表情があったよ ○交流したことや題材名から本時のめあてをもつ 〈目と心と頭をさらに働かせて「顔」から気持ちをみつけよう！〉 ・これは簡単！自分のはおこっている　それは目がつり上がっているから ・ここが丸くてかわいいけど　さみしそう？悲しい？目の大きさが… ○それぞれの顔の気持ちをクイズにし　気持ちとわけを交流する ・これはどんな気持ち？　―何だか困っている感じ（えっ違う！） ・どうして？　―この眉毛と目が下がってて…　（なるほど…／でもなあ） ○活動をふり返る ・大正解が多かった顔はどんな顔のどんな気持ち？ ・この顔ははずれが多かったけど　でも自分はこの気持ちだと思う！ ・形のわけが多かったけど色で見ている人もいた　もう顔の気持ち名人？	**○自分の「顔」を問題に答えを問いかけながら互いの見方・感じ方を交流する場** 最初の意見交流の中でもった自他の見方・感じ方を、気軽にしかし観点をはっきりもつて交流することをねらった場。気持ちが一緒ならば正解。根拠まで一緒ならば大正解とすることで、形、色、その中でも何のどんな特徴からそんな感じを受けたのかまで、聴き合うことができ、自他の見方・感じ方の共通点や相違点の認識に生かせる。そんな交流の中で自分の考えがどうなったのかも最初の記述と比較することではっきりする。積極的に行動し、かかわりが多いほどたくさんの人がそう感じる造形要素の特徴も感じ取る活動となる。あくまでそれぞれの見方・感じ方でいいこと、多数決ではないこだわりの見方があってよいことを押さえながら行う。
4　鑑賞Ⅲ　『顔がいろいろ　♡もいろいろ　いろいろ芸術家が語ります』 （なりきり芸術家 de 鑑賞会）―いろいろな顔の気持ちを語ろう ○学習内容を把握する ・『なりきり芸術家 de 鑑賞会』　えーっ!!芸術家って自分たち!? 〈するどい目とやわらかーい心と頭で 「顔」の気持ちを見つけよう！自分が作者！どんどん語ろう！〉 ○作品と出会う ・この顔はどんな気持ち？きっと目とあの色で言えるぞ ・この顔はここを大きくしてこんな気持ちに…メモしておこう ○作品について語る　聴く　交流する ・私もそう思った　みんなするどく見てる　でもまだわけがあるよ ・絵の具の付け方？筆の動かし方？　あれってタッチって言うんだ ・感じはいろいろなことで表せるってことだよね ○活動をふり返る（鑑賞会・学習全体） ・ひとつの顔でもいろいろな意見や見方があった　楽しかった ・作品の見方・感じ方はいろいろ　自分がつくる時もいろいろ工夫できる	**○『なりきり芸術家 de 鑑賞会』で考えを出し合い、聴き合い、話し合う場** 作品の顔の「形」「色」「タッチ」のもつ特徴から自分が受ける感じを、それぞれが作家本人になったつもりで発表する。正解（といわれているもの）を推し量るのではなく、今の自分の見方・感じ方でとらえた思いをもとに、質問に対し即興で答えるような率直な思いの交流も含めて語る。自分の感じ方でいいんだという気軽な雰囲気をつくり、それぞれの素直な見方・感じ方を出し合うやり取りの中で、友達の見方・感じ方に共感したり、自分との違いを感じたりするだろう。そして多様な価値観に気づくことで、自らの見方・感じ方を広げ、更新していくことへとつなげていく。

(5) 本題材における授業の実際と考察

教科論１で図画工作科における知識創造を定義したが、この実践が、めざす知識創造を促す題材であったか、教科論２で掲げた場の設定や手だて［教科論２(2)］は適切であったかを以下に考察していく。本題材は、鑑賞活動を三つのステージに分け、自らの見方・感じ方の変容を認識できるような題材構成を考え実践した。ここでは、鑑賞Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおける子どもの思いの表れや毎時間記述するカードなどをもとに題材全体を対象に検証していく。文中の〔　〕は、左に記載した題材の流れの場面を指す。また、○児として数字で特定の子どもを示した数字は付記した表１、２の番号と一致する。

－鑑賞Ⅰの流れ－

１　学習のめあてと内容を把握する

・今日は目と心と頭をきたえる日！

・するどい目だね　やわらかい心と頭だよ

２　３枚の作品や題材名から活動のイメージをもつ

これは何？－ 水入れ！（全員）いつも貼ってあるよ
これは何？－ 車の後ろの窓　ワイパー　日よけが付いてる　吸盤も見える
－（一人のつぶやき）…あれ？…顔??…
－ 顔？　何で？　ある？　えー？　…
－ あっ、ある、ある！　顔が見える！（略）
これは何？－（同時に）かおー！/マンホール！
－こまっとるみたい！あそこが目！（略）
じゃあこれは何？（再度水入れの絵を提示）
－あーっ 顔や！
さっきみんな洗う場すぐ場　水入れって言ってたよ
－でもここが目でここが口　目 目 口…

・身の回りのものから「顔」を発見するんだ　カメラで撮るよ　見方の工夫もできるね

・いっぱい　いろいろ　自分流にだね

３　グループごとにデジタルカメラを１台もつて学校を探検しながら「顔」を撮影する

C1　あった あった！
C2　えっ どこ？
C1　ほら　あそこ　目 目 口
C2　あー本当だ　顔に見える　目 目 口
C3　ここからはっきりわかるよ　ここから撮って！
（カメラマンがC3の場所に移動し撮影）
C2　あっ　あっちも顔になるんじゃない？
C1　家とかにもいっぱいありそうじゃない？

４　カードに記入し活動をふりかえる

(１児)ふつうだったら顔に見えないものがすごく見えるようになった。いろいろなものに注意して見たらいつも通っている道がいろいろ顔に見えてきた。

(14児)するどい目の勉強でした。おもしろかったです。身のまわりに気持ち悪いほどあるなんてびっくりしました。この勉強またしたいなあと思いました。するどくなりました。

①　鑑賞Ⅰ『顔かおカオがいっぱい』　― 顔を見つけよう

ア．自分の思いや意図をもつ場で

◇鑑賞領域共通のめあてを確認する

本題材でねらう「見方・感じ方の更新」を子ども一人一人が意識し、この一連の鑑賞活動に取り組めるよう、授業の冒頭で子どもと「感じ方を広げる」という本校の鑑賞領域名とその学習時に掲げている「目と心と頭をきたえよう」のめあてを確認した。これまでも（その題材の意義を認識する意味で）領域の言葉を積極的に伝えてきたこともあり、子どもから「するどい目・やわらかい心と頭」という大切にしている言葉が出てきた。ここでの確認は鑑賞Ⅱ、Ⅲの冒頭にもつながり、単にテーマ（顔）のつながりだけではなく、「見る・感じる・考える」力を培っていく学習という題材の意義を子どもに伝えることができたと考える。

◇子どもの生活の場や使っているものを鑑賞対象とする（学校探検）

それまで見えなかったものが見方を変えることで見えるようになった時の驚きと発見の喜びは、子どもの活動の様子やふりかえりの記述から見取ることができた。後日、帰り道や家での顔探しを知らせに来る子どももいた。自分の見方一つで見るものが大きく姿を変えるということは、その対象が身近であればあるほど驚きも大きい。鑑賞対象として「顔」、そして子どもの生活の場やものを対象にしたことはこれからの造形とのかかわりにもつながっていくと考えられる。

イ．感じ考え表出する場 ・ ウ．価値観を広げ更新する場で

◇3、4人で1台のデジタルカメラを持ち探検し発見過程を共有する

資料作品の鑑賞から、見慣れた掲示物の絵であった水入れが顔になった驚きが収まると、子どもは早速辺りを見回し始めた。デジタルカメラを受け取るとグループで声を掛け合い、すぐに動き始めた。この日のグループは、偶然決まったものであり、男女も意図して分けられてはいなかった。しかし、すべてのグループが、すぐさま学校探検の活動に入っていった。それは、〔Ⅰ-1、2〕の手だてにより、めあてと活動イメージをつかむことができたからといえるだろう。

資料作品から顔を見立てる際、発言する子どもが使っていた「目、目、口」という言葉があちらこちらで聞こえたことからも、しっかり発言を聴き、活動に意欲をもっていたことがうかがえる〔Ⅰ-2〕。

限られた活動時間を惜しむようにどのグループも真剣に、そして楽しそうに活動していた。小走りにいろいろな場所に移動し探そうとするグループ、慎重に一歩一歩あたりを確かめながら歩くグループなど、「あー、あったー、ほらほら」とどの子も自分の発見を他に伝えていた。その声を受けて自分たちも確認しようと、身体を寄せ合い、目線を合わせようとしている姿が多く見られた。カメラを構える仲間の後ろでも同様の姿が見られた〔Ⅰ-3〕。

一人一人が見方・感じ方のこだわりを明確にもつことができるよう、一人一人が自分でシャッターを押すことを教師は意図し、そう伝えたつもりであった。しかし、グループによっては、一人がカメラ担当となり、仲間の「あった、ここ、これ」の説明でその「顔」を写していた。この場合は瞬時の見立ての力の発揮だけで、自分流の見方で（自分が見つけた顔を自分がどんなふうにフレームの枠で切り取るかまで考えて）というめあてに対しては、その部分を人任せにしてしまっていた。しかし、カメラマンに自分がとらえた顔を伝える必要感が生まれ、言葉や身振り手振りを交えながらグループの中で伝えようとする姿があった。そこが見つけた顔をみんなで共有する一つの場になっていたともいえる。もちろん、自分でシャッターを押していたグループも自分の発見を仲間に伝える声が聞こえていた。どちらがいいというよりも、鑑賞Ⅰの活動では、互いの見方・感じ方を知るという点において、カメラ担当者のいるいないにかかわらず、グループで発見過程を共有する手だては有効であったと思われる。

－鑑賞Ⅱの流れ －

1　前時の活動をふりかえりながら作品を鑑賞する

Tどれか顔を紹介してもらおうかな?
C1ぼくのはこれです（藤の飾りの写真を指す）
C2エー?どこに顔?見えない!（他多数の同意の声）
T：たくさんの人が見つけられない 顔をC1さんは見つけられたということ　せひみんなに紹介して!
C1これとこれが目で、ここがおこった口で…
C3あっ顔や　本当や（他多数の同意の声）
T今C1さんどんな口って言った?
大勢　おこった口!　おこっとる　おこっとる
C2　よく見たら顔っぽいし　おこっとる
C4でもその写真逆さまやと思うよ　違う顔
T違う?じゃあやってみよう（回転させながら動かす）
数名　かわいーい　T怒っている顔じゃなかったの?
C4ここの目も口も笑っているように見えます
C2本当や　あっわらっとるとこもあるよ
C5ちょっと違って　目だけおこって　口は笑ってる
C6たくらんでいるみたいな顔　スネ夫みたいな（笑）

2　交流したことや題材名から本時のめあてをもつ

3　自分が選んだ顔の気持ちを考える

4　顔の気持ちをクイズにし互いの見方・感じ方を交流する

2これはどう?　33んー?
2よーく見て
33　わからない
2どうかなあ?　33うーん
2うれしそうな顔
33うーん
30この顔はどんな気持ち?
24んー?
30こう見たらどう?
（下半分を手で隠す）
24えーと…
30　こう見るとどう?わかる?（上の方も隠す）
24…なんか笑ってる?
30そうそう　…
14ぼくのは　これとこれが目で　ここが口　こんな顔です
どんな気持ちでしょうか?

5　活動をふりかえる

②　鑑賞Ⅱ『顔かおカオがいっぱい ♡がいっぱい』
—顔から気持ちを見つけよう

ア．自分の思いや意図をもつ場で

◇鑑賞Ⅰで撮った顔の作品を鑑賞対象として見合う

前時の20分弱の学校探検で9グループ合わせて180の顔を撮影した。その意欲やそれぞれの発見を大切にするために、作品すべてをプリントアウトし、提示した〔Ⅱ－1〕。子どもはその数に圧倒されながらも、自分の発見した顔を探そうと180度視界を巡らせ見入っていた。その思い入れのある作品でこの日の活動を組んだことは意欲・意識の継続という点で効果的であったと思われる。しかし、次項で述べるが、その作品の使い方には熟考すべき点があった。

イ．感じ考え表出する場 ・ ウ．価値観を広げ更新する場で

◇全員で前時の「顔」の作品を鑑賞し

意見交流の後　1対1のクイズ形式で意見交流する

前時に撮った「顔」の鑑賞場面では、一枚の作品からいろいろな見方の発言が広がっていった。この意見のやりとり〔Ⅱ－1〕の中で、発表者以外からも同意や否定、疑問を発する声が多く聞かれ、集中している様子が見られた。アの場で、自由に意見を述べ合う形態を取り、同じ写真から次々に多様な見立ての意見が出たこと、それを受け止める共感的な雰囲気がつくられたことはこの後の鑑賞活動にとって有効だったといえる。

しかし、この場面で、子どもが示していた問題点を教師が見取れずに次のクイズの活動〔Ⅱ－4〕に移ったことは本時の問題点だったといえる。実際には、子どもはしっかり自分の作品に向き合い、この顔はどんな気持ちを表す表情かと考え、そのよりどころとなる特徴をとらえようとしていた。近づけてみたり、離してみたりする動作が見られたり、他の写真と比べようとする様子が見られ、それまでの瞬間的な発見のおもしろさから、しっかり見て考える活動に移行していた〔Ⅱ－3〕。そして、クイズとして、それぞれの顔の気持ちを交流する活動では、最初は親しい仲間同士でやりとりしていたが、徐々に動きが大きくなり、男女も関係なく声を掛け合い、積極的に問いかけ話をしようという姿勢が見られた。

しかし、意欲とは反対に、「気持ちは?」と問いかけられてとまどったり、答えが出せず首をかしげたりする様子が目立った〔Ⅱ－4〕。一つの対象に対しての自他の見方・感じ方を比較することをねらった活動だったが、その際、自分が見立てた顔と相手が見立てた顔が違う場合もありうる。ここでは、提示された写真から、まず顔を見つける段階が必要だったと考えられる。「どこが、どうだから」と根拠をしっかり述べ合えば、そのズレは確認できたはずである。しかし短時間で数多くかかわることを暗に教師が求めたことが、自分のとらえた部分（主に形）の組み合わせに対して、他の見方はどうかと確認するまでには至らなかった原因になったと思われる。つまり、子どもは見る対象が曖昧になったことで、ねらいにそった話し合いができなかったということである。

「これはどう？どう？」の投げかけを繰り返していた2児は「誰もわかってくれなかった」と訴えた。しかし、30児や14児のように課題を自分なりにしっかり受け止め、より相手に伝わりやすい投げかけをしている姿も見られた。視点がはっきりするように余計な部分を隠したり、顔の部分を説明してから答えを促したりなどである。鑑賞者に対して見せる意識が発揮された場面といえる〔Ⅱ－4〕。

〔Ⅱ－1〕のやりとりから視点が曖昧になることが予想されたが、そこでの教師の見取りは、一枚の写真から子どもの見る視点が広がっていくことを肯定的にとらえ、その柔軟な見方を次の気持ち探しにもち込めるというものだった。しかし、その見取りが視点を曖昧にすることになってしまった。その結果、ねらいとして設定した価値観を広げる場とはならなかった。前述の二人のような伝え方をはっきり意識できるようにすることや「自分はここを顔と見てこんな気持ちだと思った。あなたはどう？」という対話を重ねる方法を促すなど柔軟に対応すべきであったと考える。

エ．今の自分の価値観を認識する場で

◇自分の見方を明らかにした上で、互いの作品を見合い、活動後あらためて自分の見方をふり返る

〔Ⅱ－4〕での様子から、活動後すぐに話述に入らず、全員の場を設け、ふりかえりを行った〔Ⅱ－5〕。「大正解」が多かったという作品に引き続き、前述の2児の作品を取り上げた。2児のとらえた顔と気持ちを伝えると、2児の「笑っていてうれしそうな顔」にも納得する子どもが多かった。根拠を伝え、自分たちが見ている視点をはっきりさせることで、意見交流ができることを共通理解する場となった。この後発言した19児の「ここを見るってわかってその形の特徴がわかれば気持ちを考えられるよ」の意見に同意する声が大きかった。この場で30児14児の様子を取り上げ、その行動と「見せる意識」のよさをフィードバックすることができた。

－ 鑑賞Ⅲの流れ －

1　前時をふりかえる

2　学習内容を把握する

・『なりきり芸術家 de 鑑賞会』

・自分が描いたつもりになって　作品について　どんどん紹介しよう

・この顔はこんな気持ち

4 児：くやしいと思っている口とティッシュからそう思う　ぎゅうっと握りしめている

3　作品と出会い　自分の考えをもつ

A パウル・クレー1922「セネシオ（野菊）」　C フィンセント・ファン・ゴッホ 1889「自画像」

B パブロ・ピカソ 1909「女の半身フェルナンド」　D アルブレヒト・デューラー 1505「若いベネツィア女性の肖像」

A) うわー目が目が／サル？サル？／ちがうよ！スフィンクス？／まるまるや…

B) うおー!!／こっち見ともー／骸骨？／ジャングル顔？／石かなあ？／怖いよね／泣いとる？／気にくわん顔や／しぶーい！…

C) また暗い！暗闇？／あっサル？／ゴッホゴッホ!!／女や／原始人／男や／ゴッホだよ

D) あれっ写真？／すごーい 描いた？／マリア様？／これ筆で描けんよ！（以下他も描けるかどうかの話へ）

作品Dを見ながら

28 児：鼻がちゃんと飛び出てる感じがあるよね　髪の毛もほんと回ってるみたいな　…

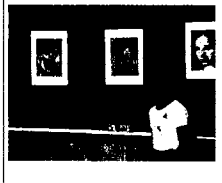
31 児：写真みたいやね

28 児：こっち(C)の方は絵っって感じやね

31 児：顔にも跡がついてるし　美術館にある感じや

28 児：こっち(D)はすーっと（テクニック）やね　…

4　作品について語る　聴く　交流する



8 児：この顔は何かを考えているよう　眉毛のここが下がっていて…　背景のこんな感じが入れているようで　夢の中にいるみたい　夢の中にいるみたいな気持ちで考えている

5　活動をふり返る

③ 鑑賞Ⅲ

『顔がいろいろ　♡もいろいろ　いろいろ芸術家が語ります』
（なりきり芸術家 de 鑑賞会）―いろいろな顔の気持ちを語ろう

ア．自分の思いや意図をもつ場で

◇鑑賞対象：美術作品における「顔(部分)」を見合う

鑑賞Ⅱでは「それぞれの見方・感じ方に違いはあるけれど、形（丸い、四角い、大小、かたむき、配置の間…など）から顔の気持ちを感じる、考えることができる」という思いをもつことができたが、色などに対する気づきは出ていなかった。そこで鑑賞Ⅲでは、形の他にも気持ちを感じ取れる要素があることに気づかせたいと考え、鑑賞作品を選んだ。形に色やタッチの見方が加わることを意図しながら、鑑賞会での活動内容を伝える作品にピカソ「泣く女」を〔Ⅲ-2〕、「なりきり芸術家 de 鑑賞会」には四点の作品を選んだ〔Ⅲ-3〕。

四点の鑑賞作品の提示については、ここでの知識創造にかかわる大切な活動である。タッチへの気づきを狙うなら、ゴッホ自画像の一作品で気づきを交流していけば、それなりに成果が得やすい。しかし、ここまで多様な「顔」をとらえてきた子どもには、それぞれ表現に特徴のある、画家が描いた「顔」に出会い、自分の感覚に訴えてくる作品を選び取ってほしいと考えた。そこで、作品の選定、点数、サイズ、並べ方、提示、掲示の仕方、課題の出し方などは、子どもの思考を考えながら構想していった。最終的に使用した四作品はそれぞれどこかに他の作品と対比できる要素をもっており、無意識であれ意識的であれ視覚的に比較することができる。比較することで、自分のとらえる部分がより明確に浮かび上がるのではないかと考えた。子どものとらえた内容（主な発言や記述）と考察は④で後述する。

イ．感じ考え表出する場・ウ．価値観を広げ更新する場で

◇『なりきり芸術家 de 鑑賞会』を設定し

作者になったつもりで自由に作品を語り　交流する

この場は、作品と出会い、自分の「見方・感じ方」をもつ活動と作品について語る鑑賞会の活動の二つで構成され、十分に時間を取ることを心がけるべき場であった。しかし、実際には、前時のふりかえりに多くの時間を費やすことになってしまった。それは、全体や個人に対して前時で至らなかった部分を補おうという意図であったが、Ⅲ-2からの活動の中で行える内容であったと思われる。

「なりきり芸術家 de 鑑賞会」は、正答を推し量り、素直に思いを出せずにいた高学年に対して、それぞれが作品を自由に受け止め、解釈してよいことを伝えたいと考え行っていた。その「なりきる」というスタイルを中学年なりに導入できないかと考えた設定であったが、子どもは「芸術家」というフィルターを用いなくても、自分なりに作品を受けとめ、語る力をもっていた。それは発達段階から来ているのか、これまでの学びの中で培われたものかは明らかではないが、作品との出会いで見せた子どもの様子から、そのことに気づき、無理になりきった言い方はさせずに出てきた発言のまま受け止め鑑賞会を進めようと教師は切り替えた。しかし、子どもにとっては曖昧な設定のままの語り合いになっていたと思われる。芸術家本人として「私はすごくすごく怒っている人を描こうと思いました。だから、目の形は、こんな感じにしたくて…、色も○色で一な感じに…」などのように表現者としての視点で語る言い回しを求められたために、作品との出会いでいろいろな思いをもったが、その後自由な話し合いの場になっていかなかったのではないかと考えられる。鑑賞会の交流では、それぞれの真の、生の声を聴きあえることが大切である。先の時間的なことを考慮しても、やはり鑑賞者としての視点と表現者としての視点が入り交じり迷いを生んだことに問題があった。

鑑賞対象となる作品一枚一枚を提示していくごとに、子どもたちの中からどよめきが起こる〔Ⅲ-3〕。いろいろな言葉が出てくる。素直に発せられるそれぞれのリアクションは大きく、聴き取った仲間の声に反応し、そこに言葉をつなげる時間となった。意欲的な反応に、この場を意図的に長くした。ここでいろいろな感じ方があることを実感し、次の一人一人が自分の思いと向き合い「なりきりメモ」に自分なりの考えを書く場へと移った。この場でも黒板に掲示した作品の前で、また、何度も作品を見に出ながらその途中で、仲間と意見交換する姿が見られた〔Ⅲ-3〕。自分の思いをもつ場としながらも子どもから出てきた作品を見たいという欲求、作品について語りたいという欲求をそのまま汲みとり、仲間とのフリートークもありの柔軟な時間とした。この〔Ⅲ-3〕での自由さ、気軽さをそのまま鑑賞会〔Ⅲ-4〕へとつなげる工夫がまだまだなされていなかった。本題材での子どもの反応をきちんととらえ、全体での進め方や、少人数のグループでの進め方（同じ作品を選んだ者同士のグルーピング・違う作品でのグルーピングなど）を再考し、子どもがもった思いを有効に伝え合えるデザインを講じていきたい。

しかし、複数作品の提示については、子どもが隣り合う作品を交互に指しながら両作品を比較し意見交流している姿やその会話から、比較が自分の思いをさらにはっきりさせよう、伝えようという動きにつながったと考えられ、有効な手だてであったといえる〔Ⅲ-3〕。

No.	鑑賞Ⅰ	鑑賞Ⅱ	
	今日の学習をふりかえって（抜粋）○△□◎	「顔」の気持ちとその理由	今日の学習をふりかえって（抜粋）気比◇◆
1	ふつうだったらみえない→すごい見えるように　「もの」に注意してみたら見えてきた◎	【ふつうの気持ち】気持ちがほとんどないから	
2	するどい目で見る　30 枚以上取った　とれたいろんなのがある　◎	【うれしそうな顔】大きな口をしてとてもうれしそうだから	よく考えてみると、顔は目の形と口の形ですごくかわる　19 児とぼくの感じ方は違う　比
3	色々な顔を→すごいもの・楽しくなるものとれた 身体を反対にくるっと回してみる　□	【のうてんき　のんびりやさん】目をつむっているから	気持ちは見えないけど表情にかくれている　悲しいとなく（人間も）　気比
4	はじめていろいろなものをよーく見た　集中すると何でも見える　おもしろい顔・表情がいっぱい　○△□◎	【いばっている王様】いばっている口「えっへん」といっている	同じ顔を見ているのに感じ方ちがう　友だちのいろいろな顔楽しかった　気比
5	偶然できた顔いっぱい見つけられてよかった　△	【ロボットがせまるような顔】ロボットがこっちをむいている ロボットに見えるわけは目と口が長方形だから	（顔探し）しんけんにさがしたら小さい顔でも見つけられた　◆
6	色々見方があるってすごく不思議　□	【おどろいている顔】大きく口をあけているから	「これはこうだと思う」みんないろいろな意見　比
7	寝ころんで写す技をつくれた(技の図解・見方を変える顔の図)　□	【ぐったりしてる感じ】目が小さくて口が大きいから	あまり正解はなかったけどみんなの気持ち　自分で考えられた　おもしろい顔がいっぱい　比◆
8	しっかりとれてよかった　△	【おこっている感じ】おかっぱさんは、目がほそいから	あっと思うものがいくつもあってどういう感じかきくとあーと思うものがいっぱいあった　気比
9	これがこうなって顔になる…を見つける　よく探してみるといっぱい　○□	【うれしそうなかお】口が横に広がっているから	目や口からいろいろな表情見つけられた　もっとじっくりさがせばいっぱい　気
10	色々なところには、色々な形がある　□	【ぽつんとしているかお】目が□になってるから	ぜんぜんわからないけど考えてみれば気持ちは分かる　気
11	いつも見ているものなのによく見ると顔に低いところにも　△□	【いかりくるった顔】目がギラギラで口がおこった口だから	よーく見るといろいろな顔（どんないろいろ　前回は場所にあった）　◇
12	すごかった　こんなにたくさんあるなんて知らなかった　目がするどくなった　△◎	【びっくりした顔】丸い顔でびっくりしている	あの顔の表情でどんな顔か分かった　気
13	顔の形探す　形があった（消火栓の図）	【ねむい気持ち】ピアノの足の目がびみょうに半分になっていて眠そうだから	みんないろいろな顔で問題→ほとんどかんたん
14	身の回りに気持ち悪いほどある　びっくり鋭い目の勉強　○△◎	【しぶい顔】目が少しとじていたから、しぶく見えた	みんないろいろなところで顔を見つけている　ぼくはできるだけできたから納得　◆
15	身の回りを探すことができるように→探すことが好きに　△◎	【ごきげんがいい顔　かわいい顔　赤ちゃんの顔】目がすごく丸いからおもしろそうな顔だと思った	たくさんどんなふうというのがすごく難しい　もっともっと鍛えたい
16	面白いものが周りにいろいろ(見方　数を変えた顔の図)　□	ないているような顔もあれば色々な方向からみればうれしい顔な感じもある！表から見るとどこにあるのか分からな～い！でもよ～くみると分かる！さがしてねおこっている感じ？	みんなこんな顔　ぼくはこう思う　人によって思うことちがう　比
17	違うところでまた探検したみたい　○	【がらーんとした感じ】目が小さくて、口がのびているから	1つじゃなく人それぞれに見方はできる　たくさんの感じ出ていた　気比◆
18	見てない色々なところで探したい　気づかなかった　そんなにあるとは気づかなかった○	【おどろいているような顔】目が丸くて口が丸に大きくあいているから	自分　おどろいたよう　みんなは顔に表情が出ていた
19	身の回りの顔を実感させる学習　たくさんあると感じられるようになった！　○◎	目がでかすぎて口が小さくておもしろい　あとびっくりしているような顔みたいです　よくみているとこっちをふしぎそうに見ているような顔です　どうしてそういうふうに見える理由はたぶん口が小さいから	みんないろいろ予想すごい　人それぞれ感じ方違うのはおもしろいな～　気比
20	意外にいっぱい　決まった位置からしか顔に見えないものもあってびっくり　□◎	【ちょっとだけおどろいている顔】目と鼻の下にある2つのまるがたてに開けている口に見えるから	自分の写真なのに自分が気づかない　顔の気持ちあって逆に「へぇ～」　気比
21	顔・かお・カオ…図（3点で探す図）横でも見れる　□	【びっくりしている顔】少し目がとびでて口が横にでっかいから	色んな人の思った顔　分かってよかった　比
22	見方を工夫した　体育館、トイレにも　□	【わらった顔　のんびりした顔】口を大きくあけている	身の回りにたくさん（よく見ると）　◆
23	目と口を探す　遠くからみるといっぱい　へんな体勢にも　3点の図　形いろいろ　□◎	【(つかまえられて）おどろいて目がとびでてる顔】たいほう　電気を食べている	1 枚の紙なのにいっぱい顔が（いろんな見方がある!!）◆
24	みんないっぱい（図2点　丸や曲線系）　□	【目が違っていておもしろい】目がへんなのになっているから	みんなの顔を見てえらそうな顔　おもしろい顔　うれしい　たのしい　しょんぼり
25	一緒 楽しい チームワーク（図1点四角）□	びっくりしたみたいに口を大きく	友だちのいいところ　顔で分かった…（？）
26	知らないところに色々なカオ　面白い顔　かわいい顔　チーム（4パターンの図）　□	【おもしろかわいい顔】おもしろい目の形をしているしずっとみていたらかわいいと思ったから	かわいいかお　おもしろい顔　いっぱい…（？） 自分が見つけていない顔　なるほどと思う　◇
27	ここだけでもたくさんある	【のんびりな感じ】口がふにゃんとなっていて目もたれているのでのんびりしているように見える	あたっている人少なかったけど見方を変えると他の顔にも…すごい　気比
28	当たり前のもの→しっかり見ると顔（図2点四角花の顔）カオに変身　□◎	【なんかとてもおもしろくてふしぎな顔】	×（書けない→前回のテーマ記述　）◆
29	顔探しを目的にして探す→たくさん　隠れたところに偶然に形があった　○△□	【ないている顔】目が小さくてしょぼいから　口がフニャフニャだから	いろいろな顔とか理由があった（見るのが楽しかった）目は葉　しおれてしょぼしょぼと気持ちをあてるのは難しかった　◆
30	小さいもの（アドバイス）→大きいもの よ～く見ると見えてくる　○□◎	ケンカしている時にも見えるし、わらっているロボットにも見えてくる　口からのところからみるとわらっているようにみえて、目からみるとにらまれている感じ	答えにくい顔も→分かると何回見てもそうやってみることが　気比
31	たくさんのところにたくさんの顔　夢中になって（3点の図）　△□	【ぼーっとしている顔】目が小さくて口がギザギザで	たくさんの顔「どんなの」と聞かれてもできるようになった　気
32	いろいろなものを見つけられるように　ヒント　もっと見つけられた　□◎	【びっくりしておどろいている顔】ひじょうドアのノブが目の玉で、白いところがたくさんに見えるから	友だちの意見は自分の考えたこととほとんどちがう 自分の考えは自分しかない　他にも鍛えられる材料があると思うからしっかり見よう　気比
33	たくさんあって少しこわい　近くにあるマンホールの模様→顔　中庭も上の高いところから見ると顔があった　○□	【おこってる】真ん中の赤いランプが鼻で黒い点々のところと赤いところが目　はい色の長四角が目　鼻のところが赤いからトナカイみたい　口が小さいから	自分（おこっている感じ）と口がまっすぐなのでさみしい顔にも見えてきた　気比

表1　鑑賞Ⅰ、Ⅱの学習カードの記述と教師の見取り

【表中の記号】 鑑賞Ⅰ：○また、もっと　△おもしろかった　□見方の気づき・工夫　◎鍛えられた

鑑賞Ⅱ：気 形と気持ちの関係の気づき　比 自他の比較　◇ 顔探し(よい進展)　◆ 顔探し(前時で留まっている)

No.	絵	なりきりメモ	発表	ふり返り	
1	A	かべにかいてあって　花の形にかいて　絵の具を水にたしてかいた感じ　T		みんなはAの目を悲しんでいるとかいっていたけど　ぼくはガクッという目だと思う	◇ ◆
2	C	心の中で怒っている	△	気持ちの感じ方がよーく見ると感じやすくなった	
3	A	見つめている　目の場所や色から考えた　△○	△	タッチとは何か知れてよかった　泣いているという意見を聞いてえーっと思ったけど理由を聞いてなるほどと思った　目が赤いから泣いているという11さんなるほどぉ!!　○☆	◇
4	C	むずかしいことを考えている（しわがよっているからそう思った） 背景は人の悩んでいる気持ち（モヤモヤ）ストレスがたまっている考えながら怒っている　○☆		考えが少しだけだったけどみんなのを聞いて考えが増えた　やわらかい頭になったかも!? いろいろ感じれた　よかった（笑顔の似顔絵）Cはゆめ　ぼくとはちがう考えだけどなるほどぉと思った　しっかり感じている　☆	◇ ◆
5	C	にらんでいるような感じ 目と目の間が目の形にそって色が付いているから　△T		これは道具を使ってやったんだと心に伝わったり目で感じたりした　どんな道具を使ったんだろう？12さんのテクニックのことはぼくが見つけられなかったことまで見つけてすごい!!　T	◇
6	C	緊張している感じ 目がしゃきっとしていて口がほんの少し垂れ下がっているから 背景が不気味なのでうれしい系の気持ちでない△		最初は「これは無理だろう」と思っていたけどだんだんこうだからこうだと次々と思ったことが出てきたのでよかった　みんなぼくが「なるほどー」というぐらいのいい意見を言っていた	◇
7	C	難しいことを考えている　怒っている（目でわかった）→背景が揺れているから夢にいると思う　△		少しやわらかい頭に近づいてきたかも Cで背景で　どこに入るのかを8さんが言ったときなるほどぉと思った　☆	◇
8	C	困った感じ(わけはまゆ毛が下がっているから)考えている感じ(真剣に　夢にいるみたい　背景があるから)　△☆	△ ☆	目とまわりのことと眉毛のことだけしか頭に入っていなかった　でも目は全体を見ていた 心のことはみんなの考えでふーんとかそうとかしかなかった　Bの14さんは色といったけどぼくは目の形が四角いからおこっていると思いました　2さんの言っていた怒っている感じがちがっていてわけもふーんと思った　△○	◆
9	C	怒っている感じ　目がにらんでいるようで鼻にしわがよっているから　△	△	目と頭が一番鍛えられた　目で見て頭でどんな感じか考えたから 目の色からこんな感じとみつけられてすごい　○	◇
10	C	暗い感じ・恐い感じ　寝ている　色が暗いし目と目の間にしわができているから　揺れていて今やっと夢についたから　△○☆	△ ○ ☆		◇
11	A	泣いている　考えている（目のかたむき）　△	△○	けっこう鍛えられたと思う　ぼけていると感じが出る　○△☆発	◇
12	C	何かを見つめている感じ	T	いろいろなテクニックと感じですごいをつくっていてすごかったしその感じを鋭い目で見つけられた　11さんの赤いところでなるほどと思った　○	◇
13	C	怒っている感じ　想像名「ゴッホの怒り」目が僕らをにらんでいて鼻に怒るときのしわがあるから　△		今日は前より自分の作品Cを見て表情を感じ取れたから前より目・心・頭を鍛えられたと思う 9さんと同じだったし　17さんもぼくと9さんによく似ていたのですごいと思った　△	◆
14	B	不気味な感じ　かくかくしていて　少し顔が怖かったりもしたような気がした　色も少し違うところもあった　△○	△○	みんなはA・C・Dといっぱいいたけど Bは一人しかいなかったのでなぜだろうと思ったリアルいろいろみんな意見を出していてなるほどといえるようになった	
15	A？	怒っている　考えている　横を向いているからそう見えた　理由を聞いてなるほどというのがたくさんあった　△☆	△	目が赤いから泣いているはなるほど　○	◇
16	D	笑っている（口の横にえくぼ見たいのができている）→見つめている（目が横を向いていて）顔の形全体的に右横斜めになっているから　外が暗いから顔を明るくすることによって顔が目立つので顔を見て欲しいということだから夜とは限らない　△		みんな形・色・タッチの中でこうじゃないかと考えてやっていた　A・B・Cは顔と同じような似ている色だけどDは顔の表情を見せるため色がちがうからA・B・Cは形を表現　こうだからこう思うというように理由でなるほどと思った（パワーアップできてよかった）○△☆発	◇
17	C	怒っている感じ　目が細くていかついしひげが生えていると怒っているという感じが出ている　△	△	この時間を終えて絵に対する目がちがってきたような気がする Cの絵をぼくは怒っていると思ったけど考えているという意見も出てなるほどと思った	◇
18	C	難しいことを考えている　怒っている　悩んでいる		AかCかまよってたけどCがテクニックみたいのがたくさんあるのでCにした　タッチがすご くむずかしい　Cは表情がうまくかけていた　怒っているが一緒だった　背景で8さんが顔以外のことをいっていてぼくは背景をあんまり気にしていなかったのでいいと思った　☆	◇
19	C	何かをよく考えている感じ		会を始める前はただの絵だと思っていたけど始めていくうちに絵の気持ち表情がだんだん分かってきた　8さんのタッチの筆跡が夢のようなところにいるというのはなるほどーと思った ☆	◇
20	A	誰かをにらんでいる　左目と右目の位置がずれていて眉毛が片方しかないから　△		会の前はAの顔がどんな感じか全然わからなかったけど会が進んでいくごとにちょっとずつ気持ちがわかるようになってきた　11さんの泣いていると聞いてえー！と思ったけど目が赤いからといっていたのでへぇーと思った　○	◇
21	D	少し暗くなったとき海を見ている感じ　○		Cを選んだ人はだいたい怒っている感じでやっぱりテクニックがあると思う　T	◇
22	D	きれいな外をじっと見ている　表情を見てそう思った　ネックレスをしている　△		会の前は頭がけっこうかたかったけど会の途中からはけっこうやわらかくなりました11さんの「Aが泣いていて目が赤い　傾いているから」はなるほどぉーと思いました　○	◇
23	D	景色を見て笑っている　夜に海に行って海を「きれいだなー」とながめて笑っている感じ　○		はっきりしていたりぼやぼやだったりしていろいろな絵があった Cの考えて怒っている感じがなるほどーと思った　☆	◇
24	C	暗い感じで怒っている　暗い感じで少しにらんでいるように　横を見て怒っている感じが見える　○		みんなの話を聞いているといろいろな顔の見方がわかった Dの絵は筆でテクニックもやっているしきれいな絵ですごい　T	◇
25	C	大切にされている　大切にされていて怒っていて考え事をしていてむっとしているような感じが出ている		いろいろな絵を見れば見るほど鍛えられていくような気がしました となりやまわり　実際に見ることが大切　見	◇
26	D	外をじっと見ている：表情を見てそう思った（but最初の自分の思い：真剣に見ている）→○○さんの①が泣いていて　目が赤い　かたむいているといっていてなるほどと思った】△		会の前は身のまわりに顔がいっぱいあるのは知らなかったけど終わって身のまわりは顔だらけとわかった　11さんが「Aが泣いているように見えるそれは目が赤いから」といってなるほどぉーと思いました　○	◇
27	A	怒った感じ　眉毛みたいなのが上がっているから　目の傾きが怒っているみたい　△		会の前　心が　どんな作品が出るかワクワクしていた　途中には①をじーっと見ると睨んで怒られている感じがした　終わっても①がまだ不思議な感じがした 11さんのAの目が赤いから泣いているということがすごいと思った　○	◇
28	C	気持ちがとてもこもっている（絵の感じがとても伝わる）自分を見て！という感じや自分を伝えたいという気持ちがとても伝わる		絶対鍛えられた　感じ方がいろいろできるようになった Cの絵がとても絵の感じが伝わる背景がフィンガー（テクニック）みたい　☆	
29	D	王女様の肖像画みたい　おしとやか　首にネックレスがかかっている　髪型がパーマのよう　色が白い　△		不思議な形色タッチがあったので　どうやってつくるか聞いてみたい　2さんの悩んでいるっていうのがありました Cがおこっているが多かったけど悩んでいるということもあった	◇
30	D	じっと何かを見つめている感じ　目が怒っているみたいににらんでいるみたいで少し恐い　しんみりした感じかな　△		どの絵もちょっと怒っているような感じがするとくにCの絵が Aの絵がおこっているにしか見えなかったけど泣いているってびっくり	◇
31	C	真剣な感じ　目があっちを見ているから真剣な感じに見えました△		最初は普通な絵だと思って絵をじっと見てるとどんな感じでいるのかなあと思った　そしてまたじーっと見ると真剣な感じに見えた　みんなの意見を聞いて　わたしはとくに同じCの人の意見を注目した　そうすると自分とはちがう考えだった　どこでそう思ったかを聞くとそうでもみれるなあと思った　☆発	◇
32	C	真剣な考え事をしている　遠いところを見ている（細目だから）年は５６才くらい…ひげが多いから　遠くからライトを当てている…顔だけ明るいから　②は色が青っぽいから一人で寂しいと思う　△○		会の前はプリントにかいたことしかほとんどないと思っていた　けど途中にCはCでも他の意見があった　いつでもわかるようにメモしておいたのでまた思い出せるようにしました Aの11さん目が赤いというところから泣いていると思っていたことがすごい（色）　Aの3さん目がかたむいていて　どこかを見つめていると思った考えたことがすごい　Cの8さん背景がゆれていて夢の中みたいといっていたのがなるほどと思った（タッチ筆跡）Cの17さん細目になりおこっているのは相手を見たくないときだと思った（形）　○△☆	◇
33	C	真剣　どこか遠いところを見ている　考えている　口が強く閉じていて真剣　△○		前：顔に緑色をたくさん使っていて不思議 途中：真剣な顔としか思わなかった 終わって：怒っているAの絵は何で赤色か考えていた11さんが泣いているようといってなるほどと思った 8さんの背景が夢の中のようという意見を聞いて流れるようだなあと思った（タッチ）○☆	◇

表２　鑑賞Ⅲの学習カードの記述・発言と教師の見取り

【表中の記号】　△：形　○：色　☆：タッチ　T：テクニック　◇：広がり　◆：こだわり

④ エ　今の自分の価値観を認識する場で（学習カードの記述を中心に）＊表１、２参照

三つの鑑賞活動それぞれに一枚ずつ学習カードを用意した。このカードには、学習中はその時々の自分の感じ考えたことを記しておき、活動の終わりには、その記述や、活動中「見て感じて考えたこと」を思い返しながら、自分の見方・感じ方の変容に気づくことができるようにした。鑑賞Ⅰでは、発見の驚きや、見方で見え方が変化するおもしろさの素直な表出をねらい自由記述とした。驚きを示す「すごい」「びっくり」の表現の他に「まだまだ探せる、もっと続けたかった、またやりたい、きっと他でも見つけられるだろう…」という次への意欲を記述したものが９人に見られた（表１中○印）。ふりかえりにはないが、①で記述したように後日、発見した顔の報告に来る子どもも複数いた。また感想だけでなく「よーく見ると…」「こんなふうに見ると…」などの見方について記したものが20あまり見られた。具体的に目、目、口の三点でとらえた顔のパターンを簡単に図解した記述も11人に見られた。以上のことから、子どもは「顔」を見立てる活動を楽しみながら見方を意識し、見る目を鍛えようとしていたととらえることができる。

鑑賞Ⅱでは、自分の見方を明らかにした上で、互いの作品を見合い、活動後に改めて自分の見方をふり返る方法をとった。最初の自分の見方は、クイズとして出題する「顔」の写真の裏に答え（見つけた「顔」の気持ちとそのわけ）を記述したものとなる（表１「顔」の気持ちとそのわけ）。書き表すことで、曖昧な印象ではなく言葉を探すことになる。そこでは、自分が判断材料とした部分やその特徴を自分なりにとらえなければならない。鑑賞活動中は、言葉のやりとりでの自他の比較となるので、自分なりの見方・感じ方を書いておくことが必要である。また、他とのやりとりの中で自分の見方・感じ方が揺らいだりする変化も、自分の最初の考えを目にすることができることで感じ取りやすいのではと考えた。実際の授業では、互いの言葉のやりとりからだけでは、ねらいとしたほどの見方を広げる場にはならなかった。しかし、一人一人の記述からは、形の丸さや角張った様子、大小、太さ細さ、かたむき、配置における間などの気づきが読み取れる。ただし、目、口にこだわった見方であり、全体として顔をとらえたものにはなっていない。部分が集まって顔全体が表現されるという、部分と全体という視点を与えることで、形だけに留まらず、その顔を構成する色や質感にも目が向けられたのではないだろうか。また、学習のふりかえりの記述（表１ 今日の学習をふりかえって）は８児や10児のように、「具体的には？」「どんな観点で？」と問い返したくなるものが多い。それは、活動自体が曖昧なものであったことを示している。先に挙げたような形に対する気づきがあること、形から気持ちを考えることができること、自分の見方の広がりを意識していることを認め、さらには、一人一人がとらえた気づきを全体の場で出し合うことで、共有できる形のとらえもあったと思われる。

鑑賞Ⅲでは、選んだ作品に対する「なりきりメモ」が、ふりかえり時の「前の自分」、鑑賞会を経てのふりかえり時が「今の自分」となる（表２）。メモとふりかえりの記述から、「形△」「色○」「タッチ☆」への気づきに分類するとその割合が大きく変化している。形については22が４となり、新たに取り上げる対象ではないと判断したということは形の見方が自分たちのものになってきているという現れと取れる。色については８から13に、タッチについては４から13に記述が増えている。鑑賞Ⅱでほとんど形からの見方に留まっていたことを考えると、見方が広がっていったととらえることができる。また、同じ作品ではあっても自分とは違う見方・感じ方の仲間の意見、また違う作品を選んでいる仲間の見方・感じ方を比較し、納得したり、納得しながらも自分の見方にこだわったりする記述（表２ ふりかえり　４児、８児など）が見られる。作品と作品、自分と他の見方・感じ方を比較し、多様な見方・感じ方をつなげることで自分の見方・感じ方を広げていったと考えられる。

最初に確認した鑑賞領域共通のめあての言葉は、ふりかえりの記述にも多く見られ、鑑賞Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの活動後、共通の言葉を用いて自身の変化についてふり返っていた。それは、「前の自分と今の自分との比較」を意識する上で、また長期的な取り組みとしてめざしている「挑戦」「もっと・さらに」の姿勢につなげていく上でも有効であったと思われる。これからも、学びの目的意識をしっかりもち、学習に取り組むことができる手だてを思考しながら、学習を進めていきたい。

(6) 成果と課題

①から④までの考察から、本実践を通してめざす知識創造が創出されたのではないかと考える。知識創造の力を育むためのかかわりの「場」のデザインやその具体的な手だてについては多くの改善の方策が加えられなければならない。しかし、教科論２でかかわりの「場」をデザインするための考え方として挙げた「比較という視点を大切にして、知識創造のプロセスをつくり上げていこうとすること」「知識創造のプロセスを意識しながら、図画工作科の４つの場を有効に機能させていくこと」の二点について、その有効性を確認できたと考える。中でも、「互いの思いを交流する場」や「個々の学びの進展を記した学習カード」で、常に比較という視点をもちながら子どもが見方・感じ方を広げたことが成果として挙げられる。

私たちは、学習活動の途中にそして最後に、メモや考えたこと、感じたことを書く活動を取り入れてきた。それは、子ども自身が学びを確認する上で、また教師が授業を評価する上で、学びのふりかえりを重要なものととらえているからである。これらのふりかえりは、本題材を通して、かかわる前とかかわった後という比較において、個々の変容をとらえるために有効なものとなった。また、書くことで、そこに「思考する」時間が生まれる。なかなか言葉にならない思いがあっても、簡単な単語に置き換えられてしまう思いであっても、それが、語り合い、聴き合う中で少しずつ形になっていくことが大切ではないかと考えている。もちろん、最初は思いつきや直感でも、出し合っていくうちに深まる思いや、思考の過程は現れるのではないだろうか。

しかし、「書くことや話すことの意味」について今一度考える必要がある。書くこと、話すことだけが、子どもの見方・感じ方、思いではないということを常に意識していかなければならない。子どもの見せる表情や姿など、一瞬一瞬をしっかりととらえ、見取り、書いたり話したりした言葉と重ね合わせて、子どもの思いを受けとめていかなければならない。また、感受語などを含めた語彙の充実は、図画工作科だけでなく他教科ともつなげながら取り組んでいかなければならないと考えている。

本題材でも試みた、子どもの発達段階や実態に合わせながら、鑑賞の対象や鑑賞の仕方を工夫すること、対象を広げ、多様な鑑賞活動を行うことが、多様な見方・感じ方に出会い、それらをつなぎ、自らの見方・感じ方を広げ、更新し、「鑑賞の能力」を高めることへとつながっていく。その能力は、自分の思いの実現のために、表したいことを見つけ、材料や用具、表し方を選び取っていく主体的な造形表現活動を支える「発想や構想の能力」や「創造的な技能」などの資質や能力にも結びついていくものになると考えている。